

〔大会記録〕ワークショップ

## 立命館大学人文系文献資料室準貴重書庫所蔵

### 明治・大正期貴重文学資料の収集と研究活動

武田 悠希

#### はじめに

立命館大学には、近代詩歌に関する書籍や雑誌を主に所蔵する白楊荘文庫をはじめとして、明治・大正期の貴重な文学資料が多く所蔵されている。その中でも本稿は、本学の人文系文献資料室準貴重書庫に収められた資料群に焦点をあて、資料収集の経緯と研究活動の在り様について、筆者自身の立命館大学学生としての経験을交えて報告するものである。

なお、本稿で紹介する資料や研究活動については、先行する参考文献が多々あるが、それらを中心的な手がかりとすることによって人文系文献資料室準貴重書庫所蔵の明治・大正本コレクションとしての経緯を概観し、これまで記されていない近年の動向や、学部生及び院生の研究活動について補い報告するものとして、本稿を位置づけることとした。

#### I 資料の収集・整理

人文系文献資料室準貴重書庫の明治・大正期の貴重書類としては、主に次のようなものが所蔵されている。

一つは、明治期に二葉亭四迷と並ぶ言文一致体小説の創始者として活躍した山田美妙関係の資料である。美妙の書き入れや蔵書印が確認できる旧蔵書、同時代の文人たちによる美妙宛の書簡、草稿類といった自筆資料など、非常に貴重な資料となっている<sup>1)</sup>。

ほかに、白楊荘文庫の資料を収集した、立命館大学文学部の教授でもあり歌人でもあった小泉琴三の研究活動をはじめとして、歴代の日本文学専攻の先生方の研究活動の中で収集されてきたと考えられる資料があり、明治・大正期の書籍や雑誌が主である。これらは美妙旧蔵書と区別されることなく受け入れと配架がなされてきたが、後述する研究会活動にて、福井辰彦氏、村田裕和氏

が確定調査をし、途中経過が公表されている。<sup>②</sup>

また近年、永らく日本文学専攻共同研究室にて保管されてきた、森本文庫の一部が準貴重書庫に移転することとなった。

それでは、各資料群の所蔵経緯を確認していこう。

昭和九年の春、美妙の長男旭彦が亡くなった折に、彼が管理していた美妙の遺した資料の多くが、立命館大学の創設者である中川小十郎を通じて本学に譲渡されたというのが、美妙関係資料の受け入れ経緯の概略である。美妙と小十郎は、東京大学予備門の同窓生であり、小十郎は美妙に、同級生らとともに女子教育の普及を期して創刊した雑誌『以良郡女』に言文一致小説の執筆を依頼し、その出版事業の運営などを託したというつながりがあった。<sup>③</sup>美妙関係の資料は、ほかに、日本近代文学館の塩田良平文庫、早稲田大学図書館の本間久雄文庫に所蔵されている。<sup>④</sup>

一方、昭和初年代の明治文学研究への関心の高まりを背景に、立命館大学でも「明治文学研究会」が、先述した小泉蓼三を中心に発足するが、おそらくそのような研究活動の過程でさらに明治・大正期の文学資料が収集されていったのではないかと推測できる。<sup>⑤</sup>なお、昭和一〇年には立命館出版部から『美妙選集』上下巻が刊行されるが、これには、「明治文学研究会」を主宰する小泉と、同研究会のメンバーでもあった柳田泉、塩田良平の三名が、本文校訂と解説解題の執筆を行っている。<sup>⑦</sup>

準貴重書庫所蔵資料の来歴のすべては把握できないが、こうした昭和初年代頃に出来上がったといった資料状況の上に、その後の

本学日本文学専攻の先生方による資料収集が加わり明治・大正期の貴重文学資料コレクションが形成されてきたと考えられる。

続いて近年の動向の一つとして、森本文庫の一部が準貴重書庫に移行するまでの経緯を確認したい。森本文庫とは、奈良教育大学教授であった森本修氏（元立命館大学日本文学専攻教授）の蔵書の中心部分を立命館大学が受け入れたものである。森本氏が亡くなられた平成三年五月に寄贈され、以後「森本文庫」として日本文学専攻共同研究室に配架されることとなった。

森本氏が芥川龍之介の伝記研究などで多くの功績を残されたということもあり、資料には芥川の初版本など貴重なものが多く含まれている。ほかには芥川の研究参考文献や労働文学関係のものがある。<sup>⑧</sup>当時の日本文学専攻にて目録が作成されたようで、現在はその情報がオンラインの「立命館蔵書検索システム（RZLIBERS）」に登録されている。そして、平成二四年三月に、森本文庫の中から芥川初版本などの一部の貴重書が人文系文献資料室準貴重書庫に移動されることとなった。

## II 近年の研究活動

続いて、以上の資料群と関わる、本学における近年の研究活動について報告する。

日本文学専攻の院生の活動としては、平成一五年に準貴重書庫所蔵資料の整理と目録化が行われたことが挙げられる。<sup>⑨</sup>その目録

は、現在 CD-ROM のデジタル版として文献資料室に配架されており、<sup>10</sup> 準貴重書庫にどのようなものが所蔵されているか、その大部分を確認することができる。また、この目録をもとに、所蔵資料の情報が先述したオンラインでの立命館蔵書検索システムにも登録された。このことによって、準貴重書庫資料が格段に活用しやすい環境が整ったといえる。

その後、平成一八年一〇月に本学図書館百周年記念事業として、国文学研究資料館と共同で「白楊莊文庫研究会」の発足がなされた。メンバーは、本学図書館と文学部、国文学研究資料館の研究者と、資料該当領域の専門研究者、大学院生で構成された。<sup>11</sup>

研究会メンバーの一人である青木稔弥氏が紹介する白楊莊文庫研究会の発足に関する文書によれば、白楊莊文庫だけでなく、本学が所蔵する明治・大正期を中心にした貴重な近代日本文学資料を包括的に概観することも視野に入れていたとのことである。<sup>12</sup> 白楊莊文庫については目録もあり比較的整理も進んでいたことから、それまでほとんど未着手であった山田美妙関係資料の調査や書簡の翻刻作業を主に進めていくことになった。美妙の草稿や宛書簡などは、この段階で初めて、分類・整理され、書簡のリストなどが作成されたものと思われる。<sup>13</sup>

この白楊莊文庫研究会は、平成一九年度末で図書館の事業としての役割を終了し、次年度以降、図書館員を除くメンバーで新たに「立命館明治文学研究会」として継続し、美妙宛て書簡集の公開を目指して翻刻作業を進めていくこととなった。<sup>14</sup> 直近の動向に

ついては後述するが、翻刻作業が終わったあとも国文学研究資料館との共同研究の場として継続している。

以上のような活動と並行して、準貴重書庫の資料は学部のゼミでも活用されてきた。ここでは、筆者が学部三回生のときに所属していた平成二〇年度のゼミでの例を紹介したい。担当教員は右に紹介した研究会のメンバーであった中川成美教授、ティーチング・アシスタントは当時院生で同じく同会のメンバーであった池田啓悟氏であり、これまで示してきた本学の資料状況とそれに関わる研究活動とを背景として設けられた授業といえる。

このゼミではまず準貴重書庫を見学して実際にいろいろな書籍を手に取り、自分が分析対象としたいテキストを書庫内の明治期のものの中から選ぶこととなった。そして、各自協力して選んだテキストのデジタル撮影と画像処理を行い、授業で使用するための教科書となる冊子作りを行った。ゼミで作成した冊子のテキスト一覧は、次に示す通りである。

野田千秋編『珍笑新誌』（開珍社、明治一一年六月）、三遊亭円朝『怪談乳房榎』（金櫻堂、明治二二年二月）、石橋思案『京鹿子』（昌盛堂、明治二三年二月）、石橋思案『代脈』（『餅むしろ』博文館、明治二八年一月）、後藤宙外『ひたごころ』（『陽炎集』春陽堂、明治三四一年一月）、山川直信・伊藤稲畔共著『言文一致女子普通文』（言文一致会、明治三四四年九月）、押川春浪『海島塔中の怪』（文武堂、明治三四年一〇月）、押川春浪『日欧空中大飛行艇』（大学館、明治三五年三月）。

<sup>14</sup> 日欧空中大飛行艇

実際に資料に触れ、装丁や内容など、さまざまな観点から選んだことで、雑誌や速記本、現在ではほとんど研究されていない作家の作品など、それぞれの学生が思いもよらないテキストを選定することとなった。作成した冊子には、撮影したテキストの影印のほかに、書誌、解説、翻刻、注釈などを入れることとした。

筆者が担当した押川春浪『海島探險塔中の怪』は、現在分かっている限りで本学を含めた九館にしか所蔵のない貴重なものであり、この授業を通してでなければ実物を手に取る機会はなかった書籍と考えられる。『海島探險塔中の怪』については、この授業での活動が現在の筆者の研究につながり、平成二四年に『論究日本文学』に論文として投稿しているが、本稿で確認してきたこの授業の背景を考えれば、それも本学ならではの資料状況とこれまでなされてきた研究活動のうえに成り立つものといえる。

以上に示した研究会やゼミ活動など、準貴重書庫資料の見直しが行われてきた流れの延長線上にあるものとして、本年（平成二六年）の四月に、それらの資料のさらなる活用を期して、本学の瀧本和成教授・田口道昭教授・中川成美教授を中心に「立命館明治・大正文化研究会」を発足することとなった。これは、先述した「立命館明治文学研究会」を引き継ぐものとして、現在、国文学研究資料館との共同プロジェクトとして活動している。

### Ⅲ 成果と公開

最後に、以上の研究会活動などによる成果と、国文学研究資料館との共同プロジェクトによる情報公開について紹介する。

先述した白楊莊文庫研究会の成果の一つとして、平成一九年一〇月から一月にかけて展覧会「立命館と立命館をめぐる文人たち」与謝野鉄幹・晶子、山田美妙を中心にが行われ、本学所蔵の美妙書簡などの資料公開がなされた。あわせて十一月一六日に記念シンポジウム「文学・明治二〇年前後」立命館所蔵資料をてがかりに」が行われた。さらに、白楊莊文庫研究会が明治文学研究会となった以降の、平成二二年一〇月から一月には、日本近代文学館にて「山田美妙没後100年展」が行われ、本学所蔵の資料も展示された。それまで、美妙の自筆資料、旧蔵書、書簡などは、本学のほかに日本近代文学館の塩田良平文庫、早稲田大学図書館の本間久雄文庫に三分されて個別に所蔵されてきたが、この展示では、国文学研究資料館を加えた四館合同の資料展という形で、はじめてこれらの貴重な資料が一堂に会し、美妙の全体像を示すことになった。この展示会に付随して一〇月三〇日に行われたシンポジウムをもとに、『文学』（岩波書店）平成二三年一一、一二月号の小特集「山田美妙没後一〇〇年」が組まれた。また、白楊莊文庫研究会での山田美妙関係資料の調査をきっかけとして、美妙没後百年の平成二二年に『山田美妙集』刊行の企

画が立てられ、平成二四年四月以降、臨川書店より随時刊行中である。<sup>②③</sup>国文学研究資料館との共同開催の研究会で翻刻が進められてきた美妙の書簡も、この一つとして刊行される予定である。

最後に、国文学研究資料館との共同で行われている情報公開について記す。平成一七年一二月に国文学研究資料館と立命館大学図書館とが「学術情報に関する相互協力協定書」と「画像データベースの利用に関する覚書」を取り交わしたが、本稿で説明してきた準貴重書庫の明治・大正期の貴重資料については、年に一、二回調査を行って書誌データや構成などの情報を細かく取得し、そのうちの貴重な資料については全文画像の撮影（デジタル収集）を行って、国文学研究資料館の「近代書誌・近代画像データベース」〈<http://school.nijl.ac.jp/kindai/>〉（平成二六年一月五日）に順次公開されている。

以上示した成果のほかに、本稿で参照してきた論文など本学資料を利用した研究の成果が公表されている。

## おわりに

以上、人文系文献資料室準貴重書庫に所蔵されている明治・大正期の貴重文学資料に焦点をあて、本学でのさまざまな研究活動の動向から形成されてきた立命館大学ならではの豊富な資料状況と、それらをめぐる研究活動の現在までの在り様について確認し、報告してきた。先述した「立命館明治・大正文化研究会」の

活動などを通じて、今後も準貴重書庫所蔵の資料を基盤とした研究のさらなる活性化が期待される。

## 注

- (1) 本学所蔵の山田美妙関係資料とその調査、研究の経過については主に次の資料が紹介している。  
青木稔弥「山田美妙関係手稿」のことなど」(『日本近代文学』七八集、平成二〇年五月)、中川成美「立命館大学所蔵 山田美妙関係資料について」(『日本近代文学館年誌 資料探索』4『日本近代文学館』平成二〇年九月)。
- (2) 福井辰彦「立命館大学蔵山田美妙旧蔵書および美妙書入本『此ぬし』について」(『論究日本文学』九二号、平成二二年五月)。
- (3) 以上の経緯については中川成美前掲論文に詳しい。また、中川小十郎自身が書き残している(中川小十郎「いらつめ」と言文一致―序に代へて―)(『美妙選集』上巻、立命館出版部、昭和一〇年一〇月)。
- (4) 分散所蔵の過程については宗像和重「古葛籠の中の美妙―早稲田大学図書館本間久雄文庫の資料をめぐって―」(『日本近代文学館年誌 資料探索』4『日本近代文学館』平成二〇年九月)を参照されたい。
- (5) 『立命館文学』一卷五号(昭和九年五月)の「学会消息」欄に明治文学研究会発足のお知らせと第一回開催情報の掲載がある。活動内容として「研究発表、批判。及資料の蒐

集解説」とある。以後、同欄に適宜活動報告などが掲載されている。

- (6) 中川成美前掲論文、七一頁参照。
- (7) 中川成美前掲論文、六九頁参照。
- (8) 以上、森本文庫については、浅田隆「思いこもごも―森本修蔵書のこと―」〔論究日本文学〕五六号、平成三年五月を参照した。
- (9) 中川成美前掲論文、七二頁参照。
- (10) 立命館大学大学院文学研究科日本文学専攻編『立命館大学人文系文献資料室所蔵明治大正本リスト』（平成一六年八月）。
- (11) 中川成美前掲論文に当時のメンバー一覧が記載されている（七二頁）。
- (12) 青木稔弥前掲論文、二七六頁参照。
- (13) 中川成美前掲論文の末尾に「立命館大学図書館所蔵山田美妙関係所蔵資料目録」が掲載されている。
- (14) 以上の研究会活動については、青木稔弥前掲論文、中川成美前掲論文、福井辰彦前掲論文を参照した。同会の研究活動の中で、平成二二年に内田不知庵宛て美妙書簡二通が立命館大学図書館に新たに購入されたが、これについては福井辰彦・大貫俊彦「山田美妙・内田不知庵往復書簡紹介および「内田魯庵著述年譜」未紹介小説「もみぢ狩」について」〔論究日本文学〕九八号、平成二五年五月を参照

されたい。

- (15) 二〇〇八年度日本文学講読演習ⅡE3クラス編『明治文芸読本』（平成二〇年一月）。ほかに前年度の冊子『明治小説集―二〇〇七年度 日本文学講読演習ⅡE3 中川ゼミテキスト―』が本学日本文学研究学域共同研究室に所蔵されている。
- (16) 武田悠希「押川春浪『海島探険 塔中の怪』における娯楽への意識―「海底軍艦」を相対化する物語として―」〔論究日本文学〕九七号、平成二四年十二月）。
- (17) 詳細は、青木稔弥前掲論文（二七七頁）及び中川成美前掲論文（七四頁）を参照されたい。
- (18) 十川信介「山田美妙没後百年展開催にあたって」（『日本近代文学館特別展「草創期のメディアに生きて 山田美妙没後100年」展図録』臨川書店、平成二二年一〇月）参照。
- (19) この経緯と校訂の過程については、須田千里「校訂の実際―臨川書店版『山田美妙集』第三巻を中心に―」（『日本近代文学』八八集、平成二五年五月）に詳しい。
- (20) 青木稔弥前掲論文、二七七頁参照。

付記 本稿は平成二六年六月に開催された第五八回立命館大学

日本文学大会での口頭報告に基づくものである。

（たけだ・ゆき 本学博士後期課程・日本学術振興会特別研究員  
D C）